

主張

原水爆禁止国民平和実行は、全国で自治体や地域の市民の協力を得ながら、被爆者とともに核兵器廃絶と平和への願いをつないで毎年、8月の広島と長崎をめざして歩きます。今年68回目を迎えます。

被爆80年の平和行進
誘い合って歩きましょう

イスラエルによるガザでのジェノサイドやロシアのウクライナ侵略が続き、軍備増強や軍事同盟強化で対抗する動きが強まっています。世界の軍事費は過去最高を更新し、アメリカ第一主義を掲げるトランプ政権がSDGs(持続可能な開発目標)まで否定するなど、人類の生存を脅かす状況です。

危うくしかねない状況です。日本被団協のノーベル平和賞受賞で、「核兵器と人類は共存できない」との被爆者の訴えにあらたな共感が広がっています。唯一の戦争被爆国日本こそ核兵器禁止条約に参加をと呼びかける宣伝行動では、小中高生を含め多くの人が署名に応じ、国への意見書を決議した地方議会は717となり4割を超えました。公共施設や学校での原爆展も広がっています。

要求いっぱい 会員大募集！

豊かな人生を新婦人で

沖縄県本部会長 久手堅幸子



宣伝行動で対話

平和の仲間を

今年に入って毎月仲間を迎え、第31回全国大会時の会員の現勢を15人超え、前進しています。その大きな推進力は、平和の運動と仲間づくりを一体にとり

くんできたことです。沖縄の現状は決して完成するはずもない辺野古基地はじめ、与那国、石垣、宮古、うるまの自衛隊基地にはミサイルが配備される。そのうえ、先島諸島の5市町村の住民12万人を対象に、九州・山口など8県への避難計画まで発表される事態に。「まるで戦争前夜だ。机上の空論、牛や豚はどうするんだ」と不安の声が上がり、連日、学習会や、要請、抗議行動など平和を求める運動が広がっています。

動が広がっています。昨年の「少女暴行事件をなかったことにしない」と開いた県民大会でも、会員が立候補した浦添市長選でも、市民と女性が主役を前面に打ち出しました。市民でもこれだけのことができると示せて、楽しく、確信になりました。その姿を見て「新婦人かっこいい。私も入れて」と、入会したMさん(30代)が、2月の次世代国会行動に参加。沖縄から初めて次世代を4人も送ることができました。

次世代に励まされ

こうしたなかで、次世代の変化を感じています。この2年余り、班や支部を越えて次世代グループをつくり、

市で生まれたMさん。3人の子の母となり、子どもたちが生きていく未来をおとな一人ひとりが真剣に考えてリスクを解決するため、普通の県民の私がどう行動していけばいいのか。と。そんな中、新婦人に出会い、「一緒に未来を変えていき



次世代の企画をパネルで紹介

要求に合わせて活動をしてきました。自然との触れ合いや野菜狩りなど楽しく活動した後は必ず、次世代が話し合う時間をとって、要求を聞くことを丁寧に行っていました。その積み重ねの中で、本人たちが新婦人とても楽しいよ」とゲストを誘ってく

る。次世代が一步踏み込んで、会員へとお誘いするようにしました。どの人もSNSに長けているので、活動の様子をすぐに発信。すぐニュースもつくって、それを見て全員が励まされています。

多彩な小グループ

もう一つは、運動の広がりとともに、仲間を増やしたいと声をかける人が広がっていることです。各地で、基地反対の座り込みなどのつながりで誘って会員に迎えています。沖縄支部が初めて自分たちでゲストを班会に誘って、しんぶんタイム

〈全2回・前編〉

訪問看護の現場より

野上栄子(仮名)



「おはようございます。お風呂屋さんです」浴槽、給湯用ホース、スライドボード、バスタオル、フェイスタオル、バケツ、ボディウォッシュ、シャンプー、浴槽洗浄用洗剤など、たくさんの器材を車に詰め込み、今日も元気な笑顔に会えることを願いつつ、入浴車を走らせます。お風呂を待つ利用者宅へ。私は、在宅介護サービス事業所で、訪問入浴の看護師をしています。介護士などと3人、場合によっては4人でチームを組んでの訪問です。「おはようございます、お風呂屋さんです」お邪魔します。大きな重い浴槽を、狭い(ごめんなさい)廊下や階段を駆使しながらなんとかベッド横に運び込む。腰痛になる職員もいます。どんなに器材が重たくても笑顔とともに声をかけをして、ベッドの利用者さんの状態を観察しつつ、必要物品を運びこみます。浴槽にお湯がたまると、介護職員、ときに介護して

浴槽、タオル、石けん…車に詰め込み

いる家族にも手伝ってもらい、湯船につかっていく利用者。ゆっくり肩までつかるといつの間、介護者によって洗髪、洗身と流れるように入浴支援が行われます。人口呼吸器を装着しているF氏は、口角の動きで、あんばい」を教えてください。「うん大丈夫」「もう上がろうか」「うん、そやな」。あうんの呼吸で、ほんのり桃色の顔を確かしつつ、離れたいだろう湯船から、ベッドにスライドボードで引き上げます。F氏は、自ら立ち上げた会社の社長で、週1日、車いすで出勤している人です。しかし、週2日の訪問入浴時は「まな板の上のコイ」のごとく、若い介護職員の手で全身をゆだね、手早く着替えさせられます。頭の表面から足の指先までの皮膚の観察で少しでも異常がみられるとすぐ家族に伝え、必要な軟こう塗布を施します。入浴が終わると必要物品をてきぱきと片付け、すべての器材を入浴車に収めるまで所要時間は一時間ほど。F氏のパソコンの中の写真を一緒に見ながら昔話をする、入浴後の短いけれどもこのようなりとりも大切な時間。「また来週ね」。私たちは次の訪問先へと急ぎます。(次回は5月31日号)